

論理国語（三学年）におけるPBLの試み

国語科 畠山 俊

三学年の論理国語（本校では「論理国語」は二学年2単位、三学年2単位の分割履修）は受験も意識しつつ行わなければならないため授業の組み立てが難しい。さらに本校では文理融合のクラス編成を行っているの
で、特に理系の生徒については三年次の現代文の授業はモチベーションの維持も難しい。また、高校教育にも
アクティブラーニングとしてグループワークが取り入れられるようになっているが、三学年でグループワー
ク中心の授業を組み立てるのも容易ではない。そのような課題がありつつも授業の全時間にアクティブラー
ニングを取り入れ、グループワークで構成できないだろうかという問題意識から今年度の授業作りが始まっ
た。

アクティブラーニングをいろいろと調べていく中で、PBLという方式に着目した。そのPBLについて溝
上慎一は次のように言っている。「PBLには『問題解決学習（problem-based leaning）』と『プロジェクト
学習（project-based leaning）』の二つがある。」（『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』
溝上慎一・成田秀夫編 東信堂 2016）

そして「問題解決学習」の定義としては「問題解決学習とは、実世界で直面する問題やシナリオの解決を通
して、基礎と実世界とを繋ぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度等を身につける学習である。」（同上）
としている。私の問題意識はこの「問題解決学習」に近いものであると考え、何らかの問題を設定し、それにつ
いて生徒と活動しながら授業を進めるスタイルとしたいと考えるようになった。

さらに、近年、「正解のない問い」を授業の中心に据える学習の必要性が叫ばれている。例えば汐見稔幸は次
のように述べる。

プロジェクト型の学びは、別の視点からいうと、答えが決まっていない問題、あるいは答えが見つから
ないかもしれない問題に対する集団的な追求、ということです。

学校はこれまで、答え、つまり正解が決まっていることを中心に、いかにしてその正解に早くたどり着
くか、という訓練をする場所でした。しかし、「これが正しい知識、解き方」といくら覚えても、社会の変
化は激しく、覚えたことを社会に出てそのまま使うということはほとんどありませんでした。知識やスキ
ル自体が古くなり、生じてくる問題が正解がないほど複雑で深刻なものが多いからです。というか、いつ
でもどこでも通じる解はない、問題自体がローカルで、本質的にはグローバルなものが多くなっているか
らです。

偶然起こることに適切に対応する心身の力のことも最近では非認知的能力と呼んでいます。これまで
学校は偶然起こる問題に対応する力ではなく、大人によって用意された必然的な問題を解く力を育てて
きました。しかし、世間に出ればほとんどが偶然起こる問題に直面することになります。それに適切な解
を考案して実践していくことが積み重なったとき、その適切解の中に必然性が見えてくるというのが実
際なのです。（『学校とは何か』汐見稔幸編著 河出新書 2024）

この汐見の見解は私自身の問題意識と通底している部分がある。「プロジェクト型」の学習をグループワーク
の形態で実施することができるのではないかと考えることになったのである。

「プロブレム型」の学習か、「プロジェクト型」の学習か、実際には截然と分けにくい部分もあるだろうが、
ともかくも進んでみようとするに至った。ここでは問題解決学習も広い意味で「プロジェクト型」の学習と
して「プロジェクト」と呼びながら報告する。

次の課題は「プロジェクト」をどのように設定するかである。私は今年度（2024年度）で教員生活40年と

なる。その中で行ってきた様々な授業実践を振り返りつつ、「プロジェクト」にできそうなものをいくつか選び、それらを組み合わせることで授業を組み立てることにした。

本稿ではその顛末を報告したい。

〈キーワード〉 論理国語 PBL Project-based learning プロジェクト グループワーク
協働的な学び

1 はじめに

平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領の「解説 国語編」をみてみよう。「改訂の基本方針」の箇所には「『主体的・対話的で深い学び』の実現にむけた授業改善の推進」の項目があり、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積も生かしながら、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要である。」（下線畠山）と冒頭に記されている。読み進めると留意点があげられている。

①授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、生徒に目指す資質・能力をはぐくむために「主体的な学び」，「対話的な学び」，「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。

②各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

③1 回 1 回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、生徒が考える場面と教師が教える場面とをどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。（下線畠山）

（以下略）

これらを総合的に考えて、ひとつの主題のもとあるまとまりをもってプロジェクトを構成する授業を考えていくことにした。今までの私自身の教育実践の中から「オノマトペを中心に据えたもの」「『鼻長僧の事』（『宇治拾遺物語』）と『鼻』（芥川龍之介）の読み比べ」「記述式問題の作成」「グラフを含む文章の読み取り」の四課題をプロジェクト化してみることにした。今回はそのうちのふたつを取り上げて、論考としたい。ただし何しろ個々の部分的な授業実践はあるものの各プロジェクトの全体構成はほぼ初めての試みである。不安も抱えての始まりとなった。

2 Project1 日本語の特質を考える

2.1 単元名・単元目標

（1）単元名・単元構成

日本語の特質を考えるーオノマトペを通じてー

文章 1 『言語の本質』第 1 章 オノマトペとは何か 今井むつみ・秋田喜美 中公新書 2023

文章 2 「日本語は非論理的か」野矢茂樹 検定教科書「精選 論理国語」数研出版所収

作業 1 オノマトペを用いた商品名とその分析

作業 2 自主開発商品とそのネーミング

（2）単元目標

学習指導要領において科目「論理国語」の目標（1）には「生涯にわたる社会生活に必要な国語について、そ

の特質を理解し適切に使うことができるようにする。」(下線畠山)とある。今回は日本語の特質のひとつであると個人的に考えている「オノマトペ」についていくつかの文章を読み合わせ、さらに作業を行うことで知識や理解を深めることをねらいとしており、そのためにはこの学習方法が適切であると考えている。さらに、この学習法により読解力、創造性、聞き話す力に加え、感性も養うことができ、総合的な国語力の伸長に寄与すると考えられる。なお、この授業は全時原則4人1組のグループワークで行った。

2.2 単元について

(1) 単元構成の主旨

近年、複数の文章を読み合わせる力が求められている。もっぱら迅速に情報を処理するという文脈で読み合わせが求められる。しかし、じっくり文章を読み比べることで物事を多面的に捉え、自身の考えを深めることも有意義であると考えられる。

文章1は「オノマトペが感覚的に理解できるため誰にでも通じるという誤解があるが、実は言語の枠組みの中にあり、日本語の文脈によって補わないと理解できない」という主張の部分を教材としている。

文章2は日本人は相手の文脈を読むことに長けており、さらに相手に文脈をつながせる技術で会話しているため、日本語自体に連関性を重視しない非論理的構造が組み込まれていると主張している。このふたつは「日本語では『相手を読んで補う』ことが必要である」点が共通して論じられている。日本人だからこそ感覚的に理解できるというオノマトペの特質を理解することで日本語そのものの運用方法について考えるきっかけとしたい。

(参考) 学びの構想図

近年、学びを作り上げるに際して「学びの構想図」として示すやり方が広まりつつある。今回もそれを作成し、それをもとにしながら授業を構想したので掲げておく。

1次

- ・「オノマトペとは何か」(p.10 1.3～p.17 1.12)を読む

意味段落要約, 全体 200 字要約

- ・「日本語は非論理的か」を読む

意味段落要約, 全体 200 字要約

2次

- ・オノマトペの研究 ワークシート (資料1)

清音, 半濁音, 濁音の語感の違いを説明する

- ・オノマトペを用いた商品名の研究

命名理由の推測 商品との関連性の説明

3次

- ・オノマトペを用いた商品名の創案

- ・プレゼン資料の作成 (資料2)

- ・プレゼン

解説 文章1から「オノマトペ」を定義する。文章2と読み合わせることでオノマトペが日本語の特質と通じていることを理解する。作業1から日本語の音^{おん}の特質を捉える。作業2で作業1の知見をいかしつつ、ネーミングを中心に商品と結び付ける創案を行う

おまけ 高校三年生の授業ということを考慮し、プロジェクトの最後にセンター試験(現共通テスト)の過

去問題から関連づけられそうなものを選んで、解答を作成した後、解説を施した。

- ・令和4年度センター試験追試験問題「メディアの中の声」若林幹夫

言語を音声の面から捉える点が今回の課題と共通している

(2) 学習活動計画

- ①文章1について意味段落の要約から全体の200字要約を考える(2時間)
- ②文章2を意味段落に分ける(1時間)
- ③自分たちの分け方によって全体の200字要約を行う(1時間)
- ④ワークシートによってオノマトペを書き出し、音による感じ方の違いを捉える(1時間)
- ⑤オノマトペを用いた商品を探し、その命名意図を考える(1時間)
- ⑥オノマトペを用いた自主商品と商品名を考え、プレゼン資料を作る(3時間)
- ⑦1グループ3分以内でプレゼンし、最優秀作を選ぶ(1時間)

2.3 授業の実際

① 文章1を意味段落に分ける作業が難航した。どこで切れるか尋ね、それに対する考えを募ったところいくつかの考え方が提示されまともになくなってしまった。特に前の話題を受けて、次の話題へつなぐ働きをする形式段落を前に付けるのと後ろに付けるのとどちらがよいのかについては意見が分かれた。とりあえず、教師側の考えにしたがって意味段落分けし、要約したうえで、さらに全体を要約させることにした。

②③ 文章1の反省を踏まえ、意味段落を統一せずに作業した後、全体の要約に向かわせた。目的は全体の要約であるから、意味段落分けの些少の差異は結果として全体要約に影響は無いと判断したことによる。最後に二つの文章の構成を解説し、その上で文章1と文章2の要約により日本語の特質が「文脈を補う」ことだという共通の考え方が読み取れることを押さえた。

④ オノマトペをワークシートに書き出させた後、各グループで「擬音語」「擬態語」3つずつを板書させた。記入後、全体から清音、半濁音、濁音でペアになるものを指摘し、同じ状況で用いるものの語感が違うものを探させ、説明させた。なかなか適切な説明がなされた。三種音の違いを考えるとハ行音に限られるのであるが、挙げられた例としては「はきはき」「はらはら」「ひりひり」「ふにふに」「ふらふら」「へこへこ」「ほわっ」「ほろほろ」などがある。

たとえば、「はらはら」→「ぱらぱら」→「ばらばら」と展開する。この三語だと「はらはら」は葉っぱのような薄いものが落ちてくる様子、「ぱらぱら」は豆粒のような軽いものが落ちてくる様子、「ばらばら」は小石などのちょっと重い物が落ちてくる様子というように「落ちてくる」共通の状態を「落ちてくる物」によって場合分けできるのである。

⑤ これも各グループでたいへん多くの商品があげられ、その命名の理由も納得のいく説明がなされた。生徒のワークシートからいくつか、商品名のみ取り上げておく。命名理由は容易に想像できるだろう。

日用品：キュキュット、ゴキブリホイホイ

医薬品：冷ピタ

食品：ガリガリ君、パリパリマン、ペロペロキャンディー、さくさくパンダ

文房具：クルトマ

ゲーム：ぷよぷよテトリス

⑥ 各グループで自由に考えさせた。ジャンルとしては現在もあるものが多かったように見受けられたが、かなりユニークな発想のものも見受けられた。また、発表用資料の作成もそれぞれに工夫を凝らし、質の高いも

のができあがった。

⑦ 発表方法も寸劇を取り入れるなど商品に合ったものとなっていた印象がある。このプレゼンは保護者授業参観と重なっており、保護者の方たちにもどれが優れていたか評価票（資料3 蘭組例）を記入していただいた。特に記述欄は設けなかったが、欄外に「国語の授業ながら、プレゼンの練習にもなり、とても良かったです。みなさん、よく考えられていて、面白かったです。」「どれも魅力的でひとつにしぼれません。」などのコメントを書いてくださった方もいた。各クラスで最も支持を得たのは次の通りである。

蘭組 「ひやチュルジェル」 日焼け止めクリーム

菊組 「ゴリゴリ氷」 菓子

梅組 「キリキリキリング」 薬剤

（プレゼン資料 蘭組最高票）



（プレゼン資料 梅組最高票）

せいやく

くやい製薬 キリキリキリング



胃のもたれ・むかつき・不快感に
スーッととけて効く

7歳から服用できる胃薬

1日3錠まで 33錠入り

副作用：眠気・倦怠感



第5代医薬品

授業者コメント

「ひやチュルジェル」は「チュル」が冷ややかな滑らかさを感じさせるオノマトペとなっている。オリジナルではないものの意味の拡大が見られる。また、資料2にある「ちゅるい夏」ともかかっており、「ちゅるい」というオノマトペはオリジナルであるが、「チュル」とも響き合っているうえに、夏の解放感も感じられ、秀逸である。

「キリキリキリング」は胃がきりきり痛むのを示すとともに後の「キリング」は英語の「kill」がかかっており、痛みのもとを殺すイメージがもたらされる（薬瓶のイラスト参照）。社名も逆さまに読むと「いやく」＝「医薬」「胃薬」がかかっているという優れものである。掛詞という伝統的な手法も取り入れているのは高校三年生ならではと思わせられる。

2.4 考察

生徒の授業後の感想を読むと、「意識していなかったので分からなかったが、身近なところにオノマトペが多く使われていたことに気付いた」というようなものが多かった。オノマトペが日本人にとっては自然に受け入れられている証左であろう。そして「自然に受け入れられている」ことを意識することは先にも述べたが省察的思考力の発露である。恐らく今後、オノマトペに対して敏感になるだけではなく、何かの場面で新しいオノマトペを創造する契機ともなろう。そして、実はオノマトペが読解のポイントになる国語教材はたくさんある。あまり意識しないでそれを扱っていることも多い。オノマトペに焦点を当てることでいくつかの教材を関わらせ横断的に学びを組織することもできる。オノマトペについて考え、適切に使えるようになることが社会生活に役立つ日本語を身につけることにもなろう。いっぽうそれが日本語の非母語話者にはどのように受け止められるかは慎重に考える必要があろう。言うなれば我々には強く意識されていない日本語の特色としてオノマトペがあると考えられる。今回の授業は生徒にそれを意識させる意義はあったように感じている。日本語を読み、書くうえで今後この経験が生きることを望んでいる。さらに、考察したオノマトペを、商品を媒介として、ネーミングの作業と結び付けることによって自身の持つ語感が揺さぶられる体験にもなった。たとえば「キリキリキリング」はほぼイ段音で構成されており、「ヒヤチュルジェル」はア段音やウ段音が多い。それぞれの語感を考えると改めて商品との結びつきの巧みさがうかがえる。このような商品開発は社会ではずっとなされるであろうし、日常会話でも、特に若い人たちは新しい語を作り、はやらせることに長けている。そのような場面でも今回の創造的思考力はいかされるに違いない。そして今回、定期考査の応用問題としてオノマトペと韻文との関わりを出題した。この課題は以前それだけを授業実践し、埼玉県国語教育研究会で発表したことがある。この課題もこれだけを時間をかけて考えたいところだが、今回は考査という形で問うことにした。ちなみにその部分の考査問題は次のようなものである。いずれも思考力を問う設問である。

問六 高浜虚子に次のような句がある。()に①「ほろと」、②「ぼろと」、③「ぼろと」のどれを入れるのがよいか、理由とともに説明しなさい。なお、実作に入っている語が何かではなく、説明がきちんとなされているかを問う設問である。

あまつち あわい
天地の間に () と しぐれ
かな

問七 北原白秋に次のような歌がある。第三句の「さくさくと」がこの歌のポイントであるが、どのような働きをしているか、説明しなさい。

君帰す 朝の鋪石^{しきいし} さくさくと 雪よ林檎の 香のごとく降れ

* 考査問題は縦書き

また、近年、国語科の課題として複数の文章を比較読みすることが取り上げられることが多い。教科書でもそのような課題を付していることがあるが、大きな枠で捉えるといくつかの文章を並べて読むことで知識を体系化できることも多い。実は今回は一つのプロジェクトのもとにいろいろな作業を行ったが、これらひとつひとつはこれまでの授業実践の中で行ったものがほとんどである。いわば小さな枠で言葉などを考える実践である。それらの自身の授業実践を振り返って、一緒に取り上げることで効果を生むものはないかを考えて今回、統一的に構成している。そのためどこか一部分を取り上げてひとまとまりの授業とすることも可能であるし、部分と部分を別の組み合わせで授業することもできる。生徒の実情に合わせて柔軟に授業プランを作り上げ、生徒と学び合えると良い。

3 Project3 美の普遍性

3.1 単元名・単元目標

(1) 単元名・単元構成

美の普遍性

文章1 「白」原研哉 東京大学 2009 年入試問題

文章2 「芸術と生きること」李禹煥 『高校生と考える 希望のための教科書』桐光学園大学訪問授業 左右社 2018

文章3 『『文化が違う』とは何を意味するのか?』岡真理 検定教科書「精選 論理国語」数研出版所収

作業1 文章2 の一部分を問題文として記述式の問題2問と解答、解説を作成する。

作業2 作成した問題を吟味し、ベストクエスチョンを選ぶ。

(2) 単元目標

平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領の「解説 国語編」では論理国語の解説部分で「思考力、判断力、表現力等」「B 読むこと」で「身に付けることができるよう指導する」ものとして「エ 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること」とある。ここでは「多面的・多角的」に読む方策として「本文から記述式問題を作成すること」を行うことにした。グループで本文の「部分」を話し合いながら徹底的に読むことによって書き手の意図を探りつつ読みを決定するやり方を身に付けることを目標とする。そしてそれを問いという形でクラスに戻し、みんなで問いを検討することで深い読解に達することを目指した。この授業も全時原則 4 人 1 組のグループで行った。

3.2 単元について

(1) 単元構成の主旨

芸術論は評論文のテーマとして多く扱われている。そして、芸術の捉え方はそれぞれの芸術家によってさまざまである。文章を読み比べながら深く文章を読むことで芸術の本質に関する理解を深めたい。

文章 1 は実際の大学入試問題で、記述式のものをそのまま解かせた。三年生の授業ということを鑑み、問題演習のトレーニングを兼ねて行った。個人的な話になるが、実はこの文章を初めて入試過去問題として読んだ際にしびれるような感覚に襲われた。このようなものの見方があるのだとひどく感動したのである。おそらく同じように感じた人も少なからずいたようで何かにつけこの問題は話題に上る。そしてこれは芸術的な観点でも捉えられる文章としてこの単元にふさわしい。入試問題を読んでいるとしばしば上のような感覚に襲われる。出典をチェックし、書籍全体を読むことも多い。実は生徒に読書を促すため自分が一ヶ月間に読んだ本をリストにして生徒に紹介している資料 4。大学入試問題から興味深いものを選んでその出典を読むこと

も多い。そうすると自分がそれまであまり関心の無かった分野などで意外に相性がよいものが見つかることもあり、おもしろい。

文章 2 は李禹煥が高校で講演した内容を文章化したものである。講演の記録であるからわかりやすい。また、李氏の芸術作品はこれも個人的に非常にインパクトがあると感じているものでその作品とも結びつけて実作者の考えを知ることが有意義であると考えた。実際、授業を行ってみると、生徒たちは氏の作品を検索し、カラーで作品を見ていた生徒も多かった。そういう意味ではこの情報化社会の恩恵は計り知れないものがある。

文章 3 は芸術をもう少し広い枠で捉え、文化として考えられるのではないかと考え、教科書の中から選んだ文章である。自国文化を絶対視するのではなく、他と異なるものとして捉えることが述べられているが、そもそも芸術を考えるうえでも大切な考え方であると考え、組み合わせた。

(参考) 学びの構想図

1 次

- ・「白」の問題を解く

クラス毎に記述式の生徒解答を抽出しながら解説を加えていく (資料 5)

- ・「芸術と生きること」を読む

2 次

- ・「芸術と生きること」を読み、記述式の問題を 2 問作成する (資料 6)

解答と解説も付ける

- ・それぞれのグループが作成した問題を吟味する

ベストクエスチョンを選ぶ

3 次

- ・3 クラスそれぞれからベストクエスチョン 2 問ずつを選び、一覧にして、評価する (資料 7)

おまけ

- ・『文化が違う』とは何を意味するのか?」岡真理

それぞれの文化を相対的に捉え、自国の文化だけに価値を置かないという文章できわめて現代的課題を扱っている。また、芸術にも当てはまる考え方である。

- ・平成 22 年度センター試験追試験問題「画家の領分」李禹煥

文章 2 と同じ作者の本文がセンター試験に過去出題されており、それを解いた。

画家の創造性とコンピューターの関りが主題で現代性もある文章である。

(2) 学習活動計画

- ①「白」の記述式問題を解く (1 時間)
- ②生徒の解答をもとにしながら解答のポイントについて解説する (1 時間)
- ③「芸術と生きること」の本文を読み、記述式の問題を各グループ、2 問ずつ作成する (4 時間)
- ④クラス毎の問題一覧を見て、ベストクエスチョンをふたつ選ぶ (1 時間)
- ⑤『文化が違う』とは何を意味するのか?」を 200 字で要約する (2 時間)
- ⑥『文化が違う』とは何を意味するのか?」の要約例を示したうえで、全体の解説を行う (1 時間)

3.3 授業の実際

- ①② 「白」は問題形式のものなのでそのまま授業内で解答する形をとった。解答用紙も実際に使用されているもので行った。解答後に回収し、各クラスの生徒の解答を抽出しながら解答のポイントを指摘した。
- ③ 「芸術と生きること」をグループで読解しつつ、何か気になる点があればチェックしておき、討議しながら問題として作り上げた。「生の眼差しと心の眼差しとの『ズレ』」や「幅」という言葉、「表現」とは何か、芸術家と人工知能による制作の違いなどは多くのグループで話題となっていた。作者の主張をどのように読み取るかも問題であるが、その気になる箇所を取り上げたとしてどのように問うことが適切なのか。さらに自分たちの想定する解答に達するためにどう問えばよいのかなど考えることが次から次へと出てきてしまうといった様子であった。
- ④ ③で作成した各グループ2問をクラス毎に一覧にし（資料7 菊組例）、その中からグループで相談しながらベストクエスチョンを選ぶことにした。全クラス分のベストクエスチョン（3クラス×2問）6問を解説をつけて提示した。その際、私個人がこの文章で問題を作成するとしたらどうするのかを「私案」で示した（資料8）。
- ⑤ 教科書教材について全体要約200字で行った。3プロジェクト目ということもあり、短い時間で要約できるようになったと実感したグループも多かった。
- ⑥ 全体要約例を示し（資料9）、文章全体の内容を説明した。

3.4 考察

今回はまず、生徒の授業後の感想をいくつか紹介する。「問題作成の授業時には自分たちのグループには無い視点から作問しているところもあり面白かった」「問題作成が新鮮で楽しかった。作成した問いに答えてもらい、さらに添削までできれば、問題の不備や理解不足もみつかるのではないかと思った。」「普段は問題を解く側にしかないが、問題を作るという意識をもって文章を読めた。それによって話の核となる部分や指示語が指す内容に注目しながら読解でき、より理解が深まった。作成後、他の班の問題を作るに至った経緯があると、さらに見方が変わると思った。」

実はこの試みのもとには私自身が現代文の問題を解く際に、ある時から、設問者の視点に立って解くと正解にたどり着きやすいと感じたことがある。最後の感想にはそれと同じような視点が感じられる。これは「批判的な読み」にも通じる視点であり、これからの国語教育に大切なものでもあろう。

また、生徒の作成した問題を一覧してみると実に様々な視点から分析していることがうかがえる。恐らく通常の読解とは異なる見方で文章を読むこととグループで読み合わせしたこととの二点と関りがあるのではないだろうか。解答を作成したり、解説を書いたりする中で改めて本文の読解の甘さに気づいている様子も見受けられた。自分たちの読み取りが十分で無いことが解答や解説にするという多面的な分析によってはつきりするのである。そのような意味では、感想にあるように問題を解いて、解説し、質疑応答するというステップを設けることも一案である。

4 評価

今回のような授業のやり方をすると、問題になるのが評価の仕方である。今回はどのように行ったかを簡単に記しておく。定期考査はそれぞれのプロジェクトで扱った文章を通常の現代文の問題として出題した。その中に、たとえば、「1.4 考察」で示したような問題も含め、それらは観点別評価の「思考・判断・表現」の評価項目とした。さらにProject1ではプレゼンでクラス内評価3位までのグループを「主体的に学習に取り組む態度」において評価した。Project2ではベストクエスチョンに選ばれた上位2問を作成したグループを評価した。これらの評価のやり方が最善だとは思わないが、評価を行う以上は何らかの基準をもって評価する必

要がある。以前、観点別評価が始まった際に、本校の教育研究会において、参加者の方から「グループワークを行う際に時間を決めてグループに張り付き、『あなたはA』『あなたはC』とその場で宣言する」と話していた先生がいる。グループワークの様子を見ていると考えていた以上に、生徒の様子―参加の仕方や意欲など―がよくわかり、そのような評価も可能であろうが、今回はグループをひとまとまりと扱い、全員の成果として扱うことにした。このような評価のやり方はあらかじめ生徒にも話しておいた。

5 生徒の感想

一年間の授業が終了した後、生徒たちにざっくばらんに感想を書いてもらった。紹介しておこう。

- ・昨年とは違って先生の講義ではなく生徒主体でグループでの対話を通して行われたので、他者との意見交換を通して自分の考えを深めることができて良かった。また、単に文章読解をするのではなく、本文の要約に取り組むことで短文にまとめる力や、本文の要旨をつかむ力をつけることができた。
- ・国語の授業といえば、扱う文章について先生が解説するという形式が自分にとっては馴染み深かったため、グループワークが中心である論国のやり方は斬新だった。が、友人らと会話を通して解釈を行う方が、ただ机に座って解説を聞くよりも自然と気持ちが文章へ向くように感じた為、とても自分に合っていたので良かったと思う。
- ・グループワークが多く、他者と意見交換をしながら取り組むことの面白さを実感した。一人で論説文を読解するよりも、グループで読解した方が様々な解釈の仕方や、意見を知ることができ、興味深かった。
- ・今年度の授業はグループワークが多かったため、他の人の考えや要約のまとめ方を参考にしながら新たな発見をすることが多かった。私は国語が苦手だが、他の人の意見をきいて筆者の意見がより明確にわかるようになったり、要約時の言葉の言い換えなどもよくわかるようになったので、グループワークでの授業はとても有益だったと思う。
- ・今年度の論理国語の授業では一方的に文章について先生から教わるのではなく、自分たち自ら文章の考察をする機会が多かったため、文章の細部まで理解しようと思えたと思う。問題作りや要約作りなどは文章の濃淡を見極めて、全体的な論理の流れを掴む必要があるのでグループの人との対話や意見交換がとても理解を深めてくれて考えや読解の方法の視野が広がって面白かった。
- ・多くの文章を読み、それについて逐一班のメンバーと考えを共有する機会が沢山あったことは、他者の考えだけでなく、自分の考えについても批判的に見直す癖がつくことに繋がり、「問い」に対して正確に答える力を磨くことができるようになり、よかった。
- ・グループワークを通して主体的に文章を見つめ活動に取り組むことができた。二年生までの、先生の話聞き理解する授業に比べ、自分で考え意見を発信する力を身につけられたと思っている。
- ・国語の授業でのグループワークは今までほとんど経験したことがなく、初めは戸惑いました。しかし、自分の考えが上手くまとめられていなくても、頭に引っかかったことを伝え、誰かしらが拾ってくれて、積極的に参加できるようになりました。
- ・もともと長文を読み切るのが苦手だったのですが、グループワークが多かったので話し合いを楽しんでいたらいつの間にか一人で長文を読むのも苦ではなくなりました。
- ・文章の要約の授業が多くあったが、要約という行為は文章の細部と全体のテーマ、筆者の主張を理解するうえで必要不可欠なものであると感じた。要約するにあたって具体例と抽象化された意見を分類し、具体例をとおしての主張に注目できるだけに細部まで本質的な理解にもなり、そういった主張を各段落から抜き出していくことで最終的にそれをまとめた全体の一番の主張を確信して把握することができることに魅力を感じた。
- ・人と話しながら答えを模索する過程に非常に面白いものがあった。そして、今までは必ず最後に正答が提示

され、自分の答に必ず赤を入れていたが、今年は何がより適しているのか模範解答を基にまた考えることができた点に教養教育の意義のようなものを感じた。答えに合わせるのではなく、より良い答案の作成や考えの深化を目的とする授業は是非もっと多くの人に経験してもらいたいと思う。

- ・文章の要約にはあまり慣れておらず、はじめはどのようにまとめていけばよいのか、どの情報まで含めばよいかが分からなかったが、他の班の要約も参考にすることで、文章の構造を把握することや、主張がどのように展開されているのかに着目しながら読めるようになり、より文章を広い視野で捉えられるようになったことがとても良かったです。

- ・一年間を通して、一つの文章を理解する上で要約がいかに大切かが分かった。最初は一段落ずつの要約から始めていたため、文章全体の要約に多くの時間を費やしてしまったが、段々と意味段落ごとに要約できるようになり、最終的にははじめから文章全体を要約できるようになった。この要約力は英語を学習する上でも役立っているため、今後も実践していきたいと思う。

- ・1,2年生の時のように、前を向いて授業を受けて、当たったら答えるという形式よりも、話し合いながらやった方が、他者の意見を聞きながら自分の意見も深まったし、自分の考えを表現する機会が増えて、学びがたくさんあったと思います。そして、この形式の授業だと友達と話せるのが楽しくて、良い受験勉強の息抜きになりました。

- ・論理国語の授業では自分で文章を読み、グループで話し合っ要約を完成させることで、グループ内のメンバーの意見を聞くことができて理解を深めることができた。特に、グループ内で話し合っている際に文章の解釈が異なってしまった場合にはなぜその考えにいたったのか議論することができ、自分の解釈の誤りを指摘してもらえることでさらに深い理解につなげることができた。

- ・論理国語といえば、先生の解説を元に、文章内容や付随する社会問題に対する理解を深めるや、文章の読み取り方を学ぶというイメージが大きかったけど、最初の授業から想像とは全く異なる授業で楽しく学べました。特にオノマトペの授業が一番印象に残っていて、清音と濁音、半濁音で、どのように感じ方が違うのかという感覚を言葉や物にするのが難しかったけどおもしろかったです。一見国語に関係なさそうでも、国語の理解を深める結果になっていると思いました。

少し長くなったが、生徒が方式や気持ちに戸惑いながらも徐々にやり方になじんでいったくれた様子がよくわかる。さらに、グループワークの効果や多面的な力の向上を感じていることもよくわかる。もちろんいいものだけを抜き出したと言われればその通りなのだが、実は他の生徒のものを紹介しても似たり寄ったりである。なるべくいろいろな効果や変化が見られるように見繕った。高校生活最後の感想なので甘くなったという点を差し引いても私自身にとってもありがたく感じる評価が多かった。生徒のみならず、自分も成長できた一年間であった。

6 1年間の概要

ここでは2つのプロジェクトを紹介したが、今年度行った4つのプロジェクトについて概要を示しておきたい。すべてのプロジェクトについて「テーマ」「教科書掲載教材」「読み合わせた文章」「過去問題演習」のそれぞれを表にしてある。参考にご覧いただきたい。

プロジェクト2の「読み比べ」では「鼻」には「鼻長僧の事」ではほとんど描かれていない主人公の内面が描かれていることに注目し、近代とは自我の確立にあるということ考えた。

プロジェクト4の「グラフ」は共通テストを意識し、グラフの読み取りを行いたいと考える中でグラフを含む英文の入試問題を見つけたのでそれを用いた。設問自体の難易度は必ずしも高くはないと思われるが、グラフの内容を言葉で説明させるなど、基本的なグラフ読み取りの確認ができると考えられる。また、読み取

ったことに対する意見を問う設問もあり、「書く力」の養成にも資すると考えた。

どのテーマもおおよそ 10 時間 + α (過去問演習等) 見当でまとめて今年度は四つの課題をこなすことができた。

テーマ	教科書教材		読み合わせ教材		センター試験 過去問		
オノマトペ	日本語は非論理的か	野矢茂樹	「オノマトペとは何か」	今井むつみ	メディアの中の声	若林幹夫	R4追
読み比べ	〈近代〉の入口と出口の間	吉見俊哉	「鼻」	芥川龍之介	運動する認識	北垣徹	H27追
			「鼻長僧の事」(『宇治拾遺物語』)				
作問	「文化が違う」とは何を意味するのか?	岡真理	「芸術と生きること」	李禹煥	画家の頼分	李禹煥	H22追
			「白」	原研哉			
グラフ	科学・技術の歴史の中での社会	村上陽一郎	M-Learning? When it comes to learning, smartphones are a liability, not an asset*	Manfred Spitzer	科学技術・地球システム・人間	竹内啓	H29追
			*2021年度群馬大学医学部医学科推薦小論文2				

7 反省と課題

予想していたことではあるが、グループによる進度の差を調整することがもっともたいへんであった。三年生ということもあり、授業以外の時間を極力使わないようにしたいというのが当初の目標であったため、全体の進度を見ながら十分な時間を取って、作業を進めたものの、時間が余りぎみのグループもあった。また、これはどのようなグループワークの際にでも起こり得ることではあるが、グループで話し合うことをせずに、個人に分担し、それを最終的にまとめるグループもあった。できれば話し合いながら作業を進めてほしいと伝え、個人→全体の流れが悪いわけでもないが、効率だけをもとめていないことはもっとこまめに伝えてもよかったとふり返っての反省材料である。また、今年度は生徒中心の授業を行おうと考えており、全体要約の後に簡単な文章に対する見取り図を示した解説を行ったが、もう少し詳細に解説を行ってもよかったとも反省している。私の考えでは読解作業はグループワークの中でかなりできているので、例えば図示するなどの端的な構成解説で済ませたが、背景や課題設定の意図も含め、詳しい説明を望んでいた生徒もいたことに感想を読んでいて気づいた。それでも四つのプロジェクトの活動により、多様な読み方のスキルが身に付いたのではないかと考える。評論文はどうしても社会の流れに合わせて「はやりすたり」がある。今回も最新のものばかりではないから、気にしすぎる必要はないと思うが、テーマを開発しつづけることが課題となる。何と何をどのように組み合わせるかは考えている以上に時間を必要とする。しかし、このような試みを多くの教員が行って、公開していけばその蓄積の中からいろいろと選ぶことができ、自分たちの学校の実態にあわせてアレンジして授業することもできるようになるのではないだろうか。生徒の感想や実際に要約にかかる時間の短縮を間近に見て、このような授業の有用性も感じた一年となった。

資料1 単元「日本語の本質を考える」GW ワークシート

3年 組 メンバー _____

日本語のオノマトペは「擬声語」と「擬態語」とに分けられる。例をあげてみよう。

擬声語（擬音語）
擬態語

清音，濁音，半濁音で関連付けられるオノマトペの例をあげてみよう。

清音	濁音	半濁音

それぞれの「音」がどのような特徴を持っているか，話し合ってみよう。

販売されている商品名でオノマトペが使われているものとジャンル，命名の理由を考えてみよう。

商品名	ジャンル	理由

自主開発商品名とどのような商品か。

資料 2-1



しゅるるむすび

さっと引くだけでシュルっとコードを巻いてくれる
おにぎりみたいな充電コード収納

色：黒・白・おにぎり



1,399円

○ TypeC TypeA iphone充電 対応

大きさ：一辺9cmの三角形 手のひらサイズ

・キャップのようにアダプタ変換できる！

・スマホを立てられるくぼみとフリップ

ワンプッシュで
長いコードもきれいに収納

資料 2-2

歩けるのは **地上** だけだと思っているそこの君へ!!!
"履くだけひょいひょい"は底裏に **超**強力な バネ 搭載!

▶ 大気圏に行きたい方には **ひょいひょい** タイプ

▶ 月まで行きたい方には **ぴよぴよ** タイプ
※ひょいひょいタイプの約600倍 (自社調べ)

**画像はあくまでもイメージです

資料 3

論理国語 3 年 日本語の特質を考える 蘭組

授業の概要

「オノマトペとは何か」を読む。

オノマトペについて考える どのような特質があるか

商品名に取り入れられているものを考察する

自分たちのオリジナル商品を作り，オノマトペを活かしたネーミングを行い，プレゼンする

各グループの商品

1 ピタマッチ	2 トウंक トウंक ドウندوق
3 スーッともちもち	4 冷やチュル
5 とうるんトメント	6 はふポテ
7 トクトク茶漬け	8 トゥリートゥメントウ
9 ハンディブファーン	10 トゥインクルンルン ダンベルン

最も良かったもの

☐

氏名 _____

保護者の方は無記名でも構いません。

資料 4

2024 年 12 月分

12 月の読書 (畠山)

㊦ 1 「カミサマはそういない」 深緑野分 集英社文庫 神は上に通じるという。上下を題材に奇異な世界を描く。

㊦ 2 ★★★★★ 「アフーマティブ・アクション」 南川文里 中公新書 入試・雇用で人種、ジェンダーなどを優遇する措置がアフーマティブ・アクションで、それにより平等な社会を目指す。ここまでしないと平等はなし得ないのかと思う。

㊦ 3 「人生で大損しない文章術」 今道琢也 新潮新書 主に大学生、社会人向けの文章指南書。著者は Web 文章塾を開講している。

㊦ 4 「詩人なんて呼ばれて」 谷川俊太郎 尾崎真理子 新潮文庫 私自身の人生も谷川氏の詩とともにあることに驚く。谷川氏へのロングインタビューを書籍化。

㊦ 5 「無意識の植民地主義」 野村浩也 松籟社 沖縄人と日本人を厳しく対峙させ、日本の沖縄に対する植民地化を検証する。民主主義である限り、政治の責任は誰しもの持っているというのはその通りだろうが、次の一手が知りたい。

㊦ 6 「マチズモを削り取れ」 武田砂鉄 集英社文庫 日本社会に根強く残る男性の優位性を鋭く指摘する。この無意識は相当に手ごわいが、放置できる問題ではない。

㊦ 7 ☆ 「なぜガザは戦場になるのか」 高橋和夫 ワニブックス PLUS 新書 歴史から説き起こし、ガザで起こっていることを分析。アメリカが鍵を握っていることもよく分かる。

㊦ 8 ☆ ☆ 「令和元年の人生ゲーム」 麻布競馬場 文藝春秋 現代の若者はこのように生きているのだということがリアルに描かれている。若者を取りまく社会について考えさせられる。

㊦ 9 「義父母の介護」 村井理子 新潮新書 エッセイストが自身の介護体験を記録をもとにまとめている。高齢化社会を迎える日本では公的サービスの充実が急務だと切に思う。

㊦ 10 「砂嵐に星屑」 一穂ミチ 幻冬舎文庫 連作短編集。どの主人公も在阪テレビ局絡みでちょっと冴えないところが味わい深い。

㊦ 11 「能力で人を分けなくなる日」 最首悟 創元社 障害のある子を育てている著者が 3 人の高校生と語る。3 人の思考が深まっていくのが分かる。いのちについて真剣に考えることは大事である。

㊦ 12 「遺言未滿」 椎名誠 集英社文庫 世界を駆け巡ってきた著者が、死や葬送に関する見聞をまとめ、そこから日本における死について考えている。

㊦ 13 「ハマスの実像」 川上泰徳 集英社新書 日本ではほとんど知られていないハマスの実像。しっかり理解したうえでいろいろな判断を下すべきだと思う。

㊦ 14 「チッソは私であった」 緒方正人 河出文庫 水俣病患者である著者の思想と生き様がよく分かる。現代に生きる以上、誰もが加害者という思想にたどり着くにはどれほどの苦悩があるのか。

㊦ 15 「パリの本屋さん」 鹿島茂 中央公論新社 パリについては世界的権威とも言える著者。パリがなぜ人を惹きつけるか。この本をひもとけばよく分かる。

㊦ 16 ☆ ☆ 「テヘランの素敵な女」 金井真紀 晶文社 イランで生きる女性たちへのインタビューで構成されている。イランの今を知るかっこの書。

㊦ 17 「法廷占拠」 呉勝浩 講談社 前作『爆弾』で捕まった犯人が法廷から逃亡。行方をくらませる。前作同様、作家の想像力には脱帽する一方、犯人が逃亡した以上、続編を期待してしまう。

㊦ 18 「日本語が消滅する」 山口仲美 幻冬舎新書 著名な日本語学者の著作。日本語はユニークな言語のひとつという。言語の多様性を守るためにも大切にしなければならぬ。

㊦ 19 「ノイエ・ハイマート」 池澤夏樹 新潮社 難民を主題とした様々なスタイルの文章が緩やかにつながっている。世界の現実がじわじわと胸にしみこんでくる。

㊦ 20 ☆ ☆ ☆ 『『コーダ』のぼくが見る世界』 五十嵐大 紀伊国屋書店 著者の両親は聴覚障害者である。そのような環境で生きるとはどのようなことなのか著者の思いから伝わってくる。多くの人にまず知ってもらいたいことである。

㊦ 21 ★ 「やまと言葉の人間学」 竹内整一 ペリかん社 なぜか、日本文学をやってきてよかったと感じた。取り上げられたやまと言葉が心にじわりとしみこんでくる。

㊦ 22 ★ ★ 「原子力の哲学」 戸谷洋志 集英社新書 現代哲学を築いてきた 7 人の哲学者が原子力をどのように扱ってきたのかを解説。楽観的な意見もあるが、核・原子力ともに人間の手に負えないと改めて思う。

23 「神の呪われた子」 石田衣良 文藝春秋 IWGPXIX 今回のメインは宗教 2 世に子ども食堂が絡む。本当にこのシリーズを読むと日本の世相の移り変わりがよくわかるだろう。

㊦ 24 「デフ・ヴォイス」 丸山正樹 文春文庫 コーダの立ち位置がよく分かる。加えて、ミステリの要素があり、読み応えがある。

○①は問題提起。②から本論。

○②「いずれかを決めかねる詩人のデリケートな感受性」「微差に執着する詩人の神経質さ」

この二つの矛盾した心理（対比）が解答のポイント。

・微差にこだわり、完成された表現を追求する心理は未成熟なものや吟味の足りないものを退けて作品を完璧に仕上げたいという意識であるということ。

生徒A 後戻りできない状況の中で、決意と明確な表現を屹立させるという緊張感ということ。→「決意」の上に「完成への」などを入れる。「屹立させるという」の「という」を取る。

生徒B 「定着」や「完成」という状態を前にすると、通常ではそれほど差がないものに対してもデリケートになり、微差に執着すること。

*「心理」を「執着」で代替しているが、「微差に執着する心理になるということ」くらいに明示するやり方もある。

○③④をまとめることで答えられる。段落冒頭の「思索」と傍線部直前にある「美意識」の二語を意識して解答を作りたい。

・白い紙に文字を書く行為が不可逆であるという経験は思索を最上のものとして完成させることを美しいと感じさせるということ。

生徒A 不可逆性が生み出した推敲という行為を行う美意識は白には訂正不能な出来事が固定されるというイメージに基づいているということ。→「出来事」を「思索」としてもよいのではないか。

生徒B 完成度や洗練を求める行為は、白い紙がもたらす不可逆性によって加速されてきたということ。

*あえて冒頭部に「何を」を入れないことで「思索」を避けることもできるが、入れば入れる。「加速」の箇所が曖昧さを含むので、「不可逆性により生み出された美しさを増してきた」くらいにしたい。

○⑤から推敲と習字の練習との関連をまとめる

・紙の上に不可逆的に自分のつたない痕跡を残すことに対する呵責の念が完成したものを目指すことを一般化し、文化としてきたということ。

生徒A 白い紙は、そこに二度と消せない筆記具で文字を書くことで責任感を抱かせ、おのずと推敲を促進させているということ。→促進させる文化を構築してきたということ。

生徒B 紙に多くの失敗の痕跡を残し続けることに対して人々が呵責の念を抱いてきたからこそ書簡などの文化がうまれた、ということ。→「書簡」ではなく「推敲」を入れてはどうか。

○⑥はインターネットの話へと話題が転じている。従来の知のあり方とインターネット時代の知のあり方を比べ、インターネットの方を丹念に拾ってまとめればよい。「対比」を見つけ、インターネットの知の「言い換え」を拾う。吉見氏の文章とも共通している。

・インターネットの知は個々に還元されない世界の人々が共有する総合知で、現実に合わせて更新され、完成することがないこと。

○「集中」は「不可逆性」の「言い換え」である。不可逆だからこそ一発で決める覚悟がいる。

・表現は白い紙に文字を定着させる不可逆な行為であるという感受性を抱いた経験が自身の未熟を実感させ、完成を目指して吟味や鍛錬を重ねることを要求する。それが文化として高められ、最高の完成されたものへの志向の象徴として白がある、ということ。

生徒A 機会是一回しかないという後戻りできないプレッシャーや緊張感がその一回をより良くしようとし集中力を高められる。その結果として完成度の高いものができ達成感が得られる。白もこのように

後戻りできない状況を作りだすためより集中させ感性度を上げる。

＊「弓矢」の話をうまく抽象化している。最後に「白」を出すことで「白」を焦点化できている。わかりやすい言葉遣いもよい。「,」もこれくらい少なくてもよい。

記述式の問題は自分の頭で考えることが求められる。それが具体から抽象への飛翔である。高校入試は抜き出しだが、それとは違うことを意識したい。

資料 6-1

美の普遍性

3年組

潘氏名

課題

1「芸術と生きること」李禹煥を読む

2▽から▼までの部分で記述式の問題を二問作成する

3解答例・解説を作成する

4他のグループが作った問題を批評する

気になる箇所

問題案

[illegible]

問題 1

解答 1

解説
1

問題 2

解答2

解説 2

資料 7

「芸術と生きること」 □□ 問題案 □ K組[↑]

問1 □「日本や韓国で石膏デザインをやることに、どれほどの意味があるのか」と問い直したくなるの
です」とあるが、なぜか。

問2□「それが人間です」とあるが、「それ」とはどういうことか。五〇字程度で答えなさい。

問3 □「音楽にも同じことが言える」とあるが、どういふことか。何と同じかを明らかにした上で答
えよ。 七

問4 □ 「そのような幅をみつめることなのです」とは、どういうことか。

問5 □「ズレ」の緊張関係を持つということとは、どういうことか。九〇字以内で説明しなさい。

問6□「僕は全くナンセンスだと思う」とあるが、それはなぜか。四〇字以内で述べよ。^七

問7□「芸術をすることはそのようなプロセスのなかに身を置くこと」とはどのようなことか。指示語を明らかにして四〇字以内で説明しなさい。^七

問8 □「相手を負かせれば良い」というのは芸術ではない」とはどういうことか。「幅」という言葉を用いて説明しなさい。 7

問9 □ 「千利休」と「この革命」に共通することは何か。

問二〇 千利休はなぜはを撒き直す再提示をしたのか。X・Yを埋めよ。

☐☐☐ 千利休は ☐X☐ が、大半の人は ☐Y☐ から。
 ち

問二〇「表現とは、このようなものなのです」とはどういうことか。／＼どのようなものか。

問二〇「芸術は、現代のものであればあるほど説得力を持つ」とはどういうことか。

問一〇 現代社会とはどのような時代かを本文を踏まえて一〇〇字以内で述べなさい。

問一「文明が大きく変わる時代には、文化はうっとおしがられます」とあるが、それはなぜか。文明と文化の特徴を明らかにして述べなさい。」

問一〇「人間にとって最も大事なのは、絶えず新たな出会いがあり実行のプロセスを経て、結果に幅を持たせること」とはどのようなことか。文章全体を踏まえて、八〇字以内で説明しなさい。」

問二〇 「幅を持たせる」とはどういうことか。本文全体を踏まえて百字程度で述べなさい。

問17□この文章における身体性の意味は何か。

問180 コンピュータが芸術家ではない理由を述べよ。

問一〇「コンピュータは芸術家ではありません」とあるが、これに関する次の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

「コンピュータ」が□1□という点で□□a□□と酷似しているのに対して、「芸術家」は□2□という点で□□b□□と類似しているといえる。

□ 1 □ □ □ a □ □ □ b □ □ に「文明」、「文化」のどちらかの言葉を選んであてはめなさい。

きなり。そ

☐2 ☐1 ☐2

にあてはまる文章を

☐1 ☐2

には三〇字以内、

☐2 ☐2

には五〇字以内で考えて書

問 〇〇コンピュータの芸術との違いに触れながら、人間が芸術をやる意義を百字以内で簡潔に説明しなさい。

問三〇「さらに先へと高揚する生」とあるが、どういうことか。

資料 8-1

「芸術と生きること」 □李萬煥

各クラスベスト2 □クエスチョン&アンサー (順番は本文に出てくる順に整えてあります)

K1 □問3 □「音楽にも同じことが言える」とあるが、どういうことか。何と同じかを明らかにした上で答えよ。

答 □線を描くときに、対象の外見を超え、その本質を描くのと同じように、音楽を演奏するときに、譜面とありではなく、演奏者の解釈に合せて音以外の表現をするという点で、生の眼差しと心の眼差しにズレがあること。

* 主題は線を描くことだが、具体例としてあげている音楽の面から聞いて、「何と同じか」ということで線について引き出す作り方が秀逸。 畠山問1と主旨は重なる。

K2 □問6 □「僕は全くナンセンスだと思う」とあるが、それはなぜか。四〇字以内で述べよ。

答 □本来はプロセスが重要なにもかかわらず、結果ばかりを重視しているから。

* 似たような箇所と同じような答えを求めているケースが多いが、この箇所から聞くことに支持が多かったのだと思う。字数制限も解答しやすくなっている。ただ、この部分は人間が人工知能より優れていることを述べる文脈なので、答えを「人工知能の結果はかりを重視するが、人間は本来重要なプロセスを大切にできるから。」(三九字)くらいになるか。

R2 □問1 □「文明が大きく変わる時代には、文化はうつろとおしがられます」とあるが、これはなぜか。

答 □文明が大きく変わる時代において過程は省かれるのに対し、文化は過程や経過を重視する保守的な概念であるため。

* この文章内で「文明」と「文化」の説明が分りにくい部分がある。そのため、私の作問例では「日本では」という部分を入れている。現代を説明するわけではないので、これくらいあっさりした説明でも違いは表現できるが、もう少し説明してほしい感じも残る。

R1 □問2 □「コンピュータは芸術家ではありません」と筆者が言っているのはなぜか。論旨を踏まえ、人工知能と人間を比較しながら書きなさい。

答 □人工知能は出来上がった答えを実現するだけだが、芸術とは生の眼差しと心の眼差しのズレをみつけるというプロセスを伴う、人間にしかできない活動であるから。

* これも人間と人工知能・コンピュータの比較なのでK2・U2と主旨は同じ。「人工知能と人間を比較しながら」とあるので、解答を考えやすいが、その分、易化する。U2の字数制限とどちらがよいかの判断となる。

U2 □問3 □「しかしコンピュータは芸術家ではありません」とあるが、それはなぜか。一〇〇字以内で説明せよ。

答 □芸術には、製作の過程での新たな出会いや試行錯誤、考えの変化を経て、理想を追求することが不可欠であるが、コンピュータはそのような身体的経験を持たず、結果のみを実現するにとどまるから。

* これもK2・R1と主旨は同じ。どの箇所でもどのように聞くかが重要。字数制限でどの程度書くか見当がつく。

U1 □問4 □この文章の題名は「芸術と生きること」であるが、筆者は芸術家として生きるとはどういうことと考えているか。(九〇字)

答 □対象との対話や自分自身の身体性など、作品が完成するまでの過程を重視することで、視覚的对象とその先を見る眼差しに幅を持たせ、絶えず新たな想像力を発揮しさらに先へと高揚すること。

* 通常の試験だと出典は最後に()書きされるからこのような設問はしにくい。意表をつかれた。個人的には「高揚する生」を聞いたかったのでこの問いにはうなずかされた。

資料 8-2

○畠山私案 □作問例

問1 □「線を描くとはどういうことか」とありますが、本文の石膏デッサンの例を踏まえて、五〇字以内で説明しなさい。

答 □生の眼差しは石膏像を見ながらも心の眼差しは本質を見ているように、生の眼差しと心の眼差しの両者を生かして行う行為のこと。

* 「石膏デッサン」の例を踏まえることで解答が限定できる。これは「幅」ということだが、「幅」自体を問うより解答させやすい。

問2 □「表現とは、このようなものなのです」とありますが、どのようなものなのでしょうか。説明しなさい。

答 □現実の対象物を真の美に近づけるために再構成し、普遍化しようとするもの。

* 表現自体を問うと様々な解答が予想されるが、指示語の問題にすることで解答範囲を絞ることができる。これは「利休の行動」にも通じており、それを問うことにもなっている。

問3 □「日本では文明と文化は明らかに違うもの」とありますが、「文化」と「文明」との違いをわかりやすく説明しなさい。

答 □「文化」とは今までの積み重ねのうえに出来上がるもので、安定期に認められるものである。プロセスで評価される。いっぽう「文明」は未来に向かう道筋のことで、過去を切り捨てるため混乱期にこそ必要とされるものである。結果で評価される。

* 「日本では」の部分を入れることで解答が明確化する。「現代」と絡めると文意がはっきりしない部分があり、解答しにくい。

問4 □「レンブラントの肖像画とそっくりな作品を人工知能が描く」いても作者はそれを評価してはいません。それはなぜか。説明しなさい。

答 □結果としての肖像画が似ていてもそのプロセスはまったく違うから。

□□結果としての肖像画が似ていても作品が完成するまでの対象と画家との対話やそれを描くための画家自身の体の使い方、身体性に欠けているから。

* 字数制限にも解答を限定する働きがある。どちらを模範解答に考えるかで字数制限を設定すればよい。もちろん誘導問題として「プロセス」を問うのも有効。そしてそれは人間と人工知能の違いにも通じる。その場合のキーワードは「身体性」。

問5 □「さらに先へと高揚する生である」とありますが、どのようなことですか。本文全体を踏まえて説明しなさい。

答 □作品と自身が常に対話しつつ、新たなインスピレーションを得、真実の美に迫るよりよい作品になるように試行錯誤を重ねること。

* 最後の問いは書かれていなくても文章全体を意識しなければならぬ傾向がある。逆に言うとうなるように問題文を長い文章から切り取っているのだから。個人的には「高揚する生」はこの文章のポイントでぜひとも多めの字数で説明させたい箇所である。

* 全体の作りは問1・問4が部分読解。問5は最後の部分から全体を踏まえて説明させる問題としていいる。同じような答えを求めている問い方がいろいろできることが実感できたのではない。そこから出題者の意図のあり方を知っておくのは解答する際の大きな力になる。

「『文化が違う』とは何を意味するのか？」 □岡 □真理

意味段落まとめ

・ 第一段落(①～⑦)

どこの社会も日常は宗教的含意に満ちているが、その社会で生きている人々はそれらが自然化しているために取り立てて意識することはない。それは文化の違いであると言えるし、お互いに十分理解可能な差異である。

・ 第二段落(⑧～⑯)

現代では「文化相対主義」の必要性が高まっているが、それは自文化への批判的認識を欠き、他文化は自文化とは異なる特殊なものだとするものではなく、差異を超えて他者との理解や対話が可能だというものである。

・ 第三段落(⑳㉑)

自文化を相対化することで得られる反・自文化中心的文化相対主義によってそれぞれの文化を理解することが新しい普遍性へと世界や私たちを開いていく。決して自分たちの固有の価値観を主張するだけではない。

全体要約

現代社会では他の社会を宗教的な意味があるものとして捉えることで、自文化とは違う理解しがたいものとする傾向がある。つまり自文化には固有の価値観があるとそれぞれが主張する文化相対主義が主流なのである。しかし、逆に自文化を批判的に捉え、相対化することで、反・自文化中心の視点をもちて差異を超えて他者との理解や対話を行おうとすることがこれからの社会に新しい普遍性をもたらしていくことになるのである。